

こどもの時間、家族の時間、社会の時間

鈴木 不二一

もうじき2030年がやってくる。ケインズが、1930年に「わが孫たちの経済的可能性」について有名な講演を行った時に、いささか楽観的な展望を描いた100年後の世界は、もはや遠い未来ではない。けれども、たどりついてみれば、21世紀初頭の世界は、少なくとも普通の人々にとっては、輝かしいものではなかった。それどころか、今日への幻滅と明日への不安がうずまく暗い閉塞状況こそが、時代の支配的潮流といつてよいだろう。

そして、残念ながら、子どもたちもまた、この閉塞の中にとりこまれている。子どもたちの中の学習意欲格差、希望格差が語られ、疲労とストレスの日常化の中での様々な病理現象も多く指摘されている。

こうした状況の中で、「社会生活基本調査」が、1996年の第5回調査において、従来の「15歳以上の世帯員」から「10歳以上の世帯員」に調査対象を拡大し、小学校高学年と中学生の生活時間、社会生活行動の継続観察を可能としたことは、画期的な意義があるといえるだろう。「未来」の担い手としての子どもたちが、どのような「現在」に直面しているかを知る上で、我々は有力な手がかりを得た。

ちょうど同じ時期に、筆者の所属する連合総合生活開発研究所（以下、連合総研と略す）も、21世紀の日本の教育改革を展望するための研究の一環として、こどもの「生活時間」と「生活実態」

に関する調査を実施した¹。ここでは、その経験を踏まえながら、「社会生活基本調査」のデータからうかがえる「こどもの生活時間」について考えてみたい。具体的には、「10～14歳」の年齢階級の生活時間に着目して、まず、こどもの生活時間の特徴を概観する。次に、こどもの時間と家族の時間との関わりを考えてみる。そして、ボランティア活動への参加実態を例に、こどもの時間と社会の時間との関わりを見てみることにする。

1 「学業」中心の生活時間構成

まず、こどもの生活時間の構成を見てみよう。表1は、行動の種類別に、「10～14歳」の行動者平均時間、行動者率を見たものである。

第1次活動では、睡眠時間（行動者平均時間による。以下同様）が平日8時間24分、日曜日9時間26分となっていて、日曜日の睡眠時間は平日よりも約1時間長い。日曜日に寝不足を補っているようなパターンを示している。土曜日の睡眠時間

1 調査は、1995年9月に、「子どもの生活時間調査」、「子どもの生活実態アンケート」、「子どもの母親へのアンケート調査」の3つの自記入式調査票を、北海道、東京、長野、静岡、富山、大阪、宮崎の7都道府県の連合組合員とその家族を対象に配布し、実施された。小学5～6年生の親子、中学2～3年の親子、それぞれ800件ずつに調査票を配布し、有効回答数は、小学生親子422件（有効回収率52.8%）、中学生親子358件（同44.8%）であった。調査結果は、連合総合生活開発研究所（1996）、「子どもの生活時間調査研究報告書」として発表されている。

は8時間34分で平日よりも長い、その差は僅かである。食事時間も、平日1時間28分、日曜日1時間38分となっていて、日曜日の方が10分長い。なお、「身の回りの用事」に関しては、曜日の間にほとんど差は見られない。

2次活動の中心は、当然ながら「学業」である。平日では、「学業」は6時間26分で、文字通り2次活動の中心をなす。土曜日、日曜日でも、それぞれ、4時間14分(行動者率79.3%)、2時間59分(行動者率28.1%)が「学業」にさかれており、もっとも比重の大きな行動の種類であることは変わらない。一方、「家事」については、土曜日や日曜日でも行動者率10数%にとどまっている。結局、平日も休日も、こどもの生活は「学業」を中心に回っていることになる。

第3次活動の分野では、「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」が行動者率8～9割に達し、平均行動者時間は平日2時間8分、土曜日2時間56分、日

曜日3時間28分で、もっとも大きな比重をしめる。「趣味・娯楽」「スポーツ」「学習・研究(学業以外)」も、行動者率3～4割、平均行動者時間も平日で1時間40～50分、土日では2～4時間と、かなりの比重を占める。なお、「趣味・娯楽」の中心は「ゲーム」である。

2 起床と就寝のリズム—宵っ張りの朝寝坊ができる日、できない日

睡眠時間が日曜になると急に長くなるのは気になるところである。休日にはふだんの寝不足を解消しようとしているのだろうか。こどもたちの起床と就寝のリズムを曜日別に見てみよう。

睡眠行動の場合、行動者率が100%から0%に向かって減少していく局面と0%から100%に向かって増加していく局面がはっきりしていることから、起床時間と就寝時間の特性値を推計することが可能である。表2は平成13年調査の年齢別時間

表1 行動の種類別、行動者平均時間及び行動者率(10～14歳人口、男女計)

	平日		土曜日		日曜日		
	行動者平均時間	行動者率	行動者平均時間	行動者率	行動者平均時間	行動者率	
	時間.分	%	時間.分	%	時間.分	%	
1次活動	睡眠	8.24	100.0	8.34	100.0	9.26	100.0
	身の回りの用事	1.05	96.7	1.06	94.4	1.08	91.8
	食事	1.28	99.9	1.32	99.8	1.38	99.8
2次活動	通勤・通学	0.49	92.4	0.47	71.5	0.44	6.6
	仕事	1.13	0.5	1.23	0.4	1.32	0.2
	学業	6.26	96.0	4.14	79.3	2.59	28.1
	家事	0.47	8.1	0.54	11.2	0.58	12.6
	介護・看護	1.10	0.1	0.55	0.1	0.52	0.2
	育児	0.57	0.4	1.06	0.6	1.00	0.6
	買い物	0.50	6.7	1.17	20.4	1.37	32.2
3次活動	移動(通勤・通学を除く)	0.55	29.8	1.05	47.4	1.23	56.8
	テレビ・ラジオ・新聞・雑誌	2.08	78.1	2.56	81.9	3.28	86.0
	休養・くつろぎ	1.57	82.2	2.06	75.3	2.16	68.1
	学習・研究(学業以外)	1.52	46.2	2.16	33.7	2.33	30.5
	趣味・娯楽	1.46	33.9	2.48	43.9	3.23	48.2
	スポーツ	1.59	30.0	3.14	35.3	4.22	31.5
	ボランティア活動・社会参加	1.20	1.2	2.35	3.4	3.37	4.6
	交際・付き合い	1.42	9.9	3.05	16.6	3.26	18.7
	受診・療養	2.09	2.5	1.38	2.8	2.17	1.2
	その他	0.57	18.0	1.50	16.5	2.08	19.3

出所 総務省統計局「平成13年社会生活基本調査」

帯別行動者率集計表を用いて、「10～14歳」階級の起床と就寝の特性値を、平日、土曜日（学校のある日）、土曜日（学校のない日）、日曜日に分けて推計したものである。これによって、起床、就寝が、それぞれ10%、25%、50%、75%、90%に達している時間を知ることができる。

まず、平日から見ていこう。6時13分には10%の子が起床している。6時58分には半分の子が、7時28分には、朝寝坊のこどもも含めて、90%が起きています。第1・十分位数と第9・十分位数に早起きと遅起きを代表させるとすると、平日の場合両者の起床時間の差は1時間15分で、比較的短時間のうちに、ほとんどのこどもが眠りから覚める。けれども、起床時間が7時半近くになる遅起きの子はゆっくり朝食をとる時間がないかもしれぬ。

就寝時間はどうか。早寝の10%のこどもは9時10分までには眠りについている。しかし、就寝が半数に達するのは22時34分、4分の3が眠りにつくのが23時11分、0時3分になっても10%のこどもはまだ起きています。就寝時間は、起床時間のように短期集中ではなく、遅寝（第9・十分位数）

と早寝（第1・十分位数）の間は実に3時間近くも離れている。宵っ張りのこどもが相当にいるということである。けれども、平日の場合は学校の始業時間に間に合うように起きなければならないので、宵っ張りのこどもでも、そんなに朝寝坊はできない。睡眠不足のこどもが、かなりいるのではないかと推測される。

日曜日の起床パターンは、平日とはまったく異なるパターンを示す。早起きの10%のこどもは6時13分には起きています。これは平日とまったく同じである。ところが起きている子供が半数に達するのは7時45分で、平日よりも47分遅い。遅起きの子の10%のこどもは、なんと10時過ぎになっても起きていない。早起きと遅起きの子の差は3時間51分も開いている。宵っ張りのこどもは、なんとか日曜日で睡眠不足の埋め合わせをしているのだろう。就寝時間については、起床時間ほど、平日と日曜日の違いは目立たないが、宵っ張りのこどもが30分ほど早く眠りにつく傾向がみられ、23時35分には就寝率90%に達する。日曜日の夜は、翌日は学校があることを意識して、宵っ張りのこどもも早く寝る傾向を示すのだろうか。

表2 曜日別起床時間、就寝時間の特性値（10～14歳人口、男女計）

	平日		土曜(学校のある日)		土曜(学校のない日)		日曜		
	時	分	時	分	時	分	時	分	
起床	第1・十分位数	6	13	6	9	6	31	6	13
	第1・四分位数	6	36	6	37	7	7	7	4
	中央値	6	58	7	2	7	39	7	45
	第3・四分位数	7	12	7	13	8	30	8	56
	第9・十分位数	7	28	7	31	9	28	10	4
	第9・十分位数と第1・十分位数の差	1	15	1	22	2	57	3	51
就寝	第1・十分位数	21	10	21	11	21	13	21	11
	第1・四分位数	22	2	22	0	21	44	21	48
	中央値	22	34	22	15	22	24	22	14
	第3・四分位数	23	11	23	8	23	6	23	5
	第9・十分位数	0	3	23	50	23	36	23	35
	第9・十分位数と第1・十分位数の差	2	53	2	39	2	23	2	24

出所 総務省統計局「平成13年社会生活基本調査」より推計。

土曜日の場合、学校の「ある日」と「ない日」で、起床と就寝のパターンが異なる。「学校のある日」は平日のパターンに近く、「学校のない日」は日曜に近い。

何故就寝時間が遅くなるのか。その主な理由の1つは、「テレビ・ラジオ」の視聴が深夜に及ぶことである。平日の場合、22時で約3割、23時で約1割強のこどもが「テレビ・ラジオ」を視聴している。これに加えて、男の子の場合は「ゲーム」を夜遅くまでやっていることも宵っ張りの原因になる。さらには、塾や習い事で帰宅が遅くなることも影響しているだろう。

表3によって、小中学の学年別に曜日別睡眠時間数を見ると、平日や学校のある土曜日の睡眠時間が短くなる傾向は学年が上がるほど高まる傾向にあることがわかる。特に中学2、3年生の場合は、平日の睡眠時間は、それぞれ7時間54分、7時間42分と、8時間を割っている。中学生の場合には、受験を控えて、家での勉強時間も睡眠時間を圧迫していると思われる。

3 こどもの時間と家族の時間

こどもたちは、1日のうちの様々な行動を、誰と過ごしているのだろうか。個人の時間は、行動を共にする他者との関係を考慮すると、家族の時間、社会の時間の側面を持つ。職業生活を営む個人を想定すると、職業時間、産業時間といったカ

テゴリーも重要な意味を持つ。こうした生活時間の様々な側面に着目する分析が進展しつつあるが、「社会生活基本調査」の集計項目である「一緒にいた人」という変数も、そのような分析に有力な手がかりを与えるものである。

ここでは、家族時間の中でのこどもの生活時間を考えてみよう。表4-1~3は、主な行動の種類について、「一緒にいた人」別の行動者平均時間、行動者率を示している。

まず、総数から見ていくと、家族の中では母親と過ごす時間がもっとも多く、平日3時間26分、土曜日4時間31分、日曜日6時間27分となっている。一方、父親と過ごす時間は、平日は1時間54分にとどまるが、土曜日3時間7分、日曜日5時間26分となっていて、週休日になるとかなり増加し、母親との差も1時間~1時間半ほどにまで縮小する。学校、職場での週休2日制の進展は、子供の時間の中の家族時間の割合を高めることがわかる。平日の父親との接触時間が少ないのは、父親の帰宅時間が遅いことの影響が大きいことから、残業時間の削減によるワークライフ・バランスの是正は、こどもの生活時間における父親との接点を増やすことにも寄与すると考えられる。これは、家族時間と産業時間の調和をめぐる問題の1つとして考えることもできよう。今後このような視点からの「社会生活基本調査」の分析の深化が、大いに期待される場所である。

表3 曜日別、学年別、小中学生の睡眠・総平均時間数（男女計）

	平日		土曜日(学校のある日)		土曜日(学校のない日)		日曜	
	時間	分	時間	分	時間	分	時間	分
小学生	8	53	8	44	9	18	9	38
うち、5年生	8	58	8	45	9	23	9	4
6年生	8	42	8	37	9	18	9	36
中学生	7	53	8	0	9	0	9	15
うち、1年生	8	6	8	10	8	54	9	14
2年生	7	54	8	2	9	2	9	12
3年生	7	42	7	49	9	4	9	19

出所 総務省統計局「平成13年社会生活基本調査」

表4-1 行動の種類別、一緒にいた時間、行動者率（10～14歳）－平日

		一緒にいた人				
		一人で	父	母	その他の家族	学校・職場・その他の人
総数	行動者平均時間（時間.分）	10.47	1.54	3.26	3.23	9.12
	うち、睡眠時間（時間.分）	8.25	-	-	-	-
	行動者率（%）	100.0	67.9	94.2	85.3	99.2
食事	行動者平均時間（時間.分）	0.25	0.41	0.57	0.50	0.37
	行動者率（%）	14.1	54.3	91.7	82.7	87.3
学校での授業・ その他学校での行動	行動者平均時間（時間.分）	0.49	-	1.00	1.15	5.46
	行動者率（%）	2.5	-	0.4	0.3	97.7
学校の宿題	行動者平均時間（時間.分）	1.20	0.56	0.51	0.52	0.36
	行動者率（%）	42.3	10.9	28.0	21.4	7.0
買い物	行動者平均時間（時間.分）	0.40	0.30	0.40	0.42	1.11
	行動者率（%）	1.4	0.1	2.9	1.5	1.1
テレビ・ラジオ	行動者平均時間（時間.分）	1.10	1.02	1.25	1.33	0.42
	行動者率（%）	26.1	36.5	63.7	59.4	1.7
家族とのコミュ ニケーション	行動者平均時間（時間.分）	-	0.34	0.38	0.46	0.41
	行動者率（%）	-	3.7	6.3	3.9	0.6
ゲーム	行動者平均時間（時間.分）	1.05	0.53	1.00	1.12	1.31
	行動者率（%）	12.8	3.4	20.0	17.5	29.6
人と会って行う 交際・付き合い	行動者平均時間（時間.分）	-	-	2.00	0.30	0.56
	行動者率（%）	-	-	0.4	0.2	43.5

表4-2 行動の種類別、一緒にいた時間、行動者率（10～14歳）－土曜日

		一緒にいた人				
		一人で	父	母	その他の家族	学校・職場・
総数	行動者平均時間（時間.分）	11.42	3.07	4.31	4.41	7.17
	うち、睡眠時間（時間.分）	8.52	-	-	-	-
	行動者率（%）	100.0	72.3	94.5	80.1	93.5
食事	行動者平均時間（時間.分）	0.32	0.54	1.09	1.09	0.41
	行動者率（%）	27.5	63.5	90.9	74.6	26.1
学校での授業・ その他学校での行動	行動者平均時間（時間.分）	1.45	2.15	2.55	-	3.39
	行動者率（%）	0.9	0.2	1.0	-	76.9
学校の宿題	行動者平均時間（時間.分）	1.29	1.06	1.03	1.08	0.46
	行動者率（%）	28.6	6.7	12.7	12.2	6.4
買い物	行動者平均時間（時間.分）	0.28	1.33	1.17	1.17	1.08
	行動者率（%）	4.5	6.1	11.5	6.7	6.1
テレビ・ラジオ	行動者平均時間（時間.分）	1.19	1.31	1.48	2.00	1.12
	行動者率（%）	30.2	46.3	66.8	57.7	4.1
家族とのコミュ ニケーション	行動者平均時間（時間.分）	-	0.51	0.51	1.11	1.10
	行動者率（%）	-	5.9	9.6	8.1	1.2
ゲーム	行動者平均時間（時間.分）	1.28	1.14	1.05	1.24	2.26
	行動者率（%）	22.2	8.0	16.6	19.3	32.9
人と会って行う 交際・付き合い	行動者平均時間（時間.分）	-	0.30	0.52	0.30	0.51
	行動者率（%）	-	0.2	2.2	1.6	30.7

表4-3 行動の種類別、一緒にいた時間、行動者率（10～14歳）－日曜日

		一緒にいた人				
		一人で	父	母	その他の家族	学校・職場・その他の人
総数	行動者平均時間（時間、分）	12.47	5.26	6.27	6.38	6.04
	うち、睡眠時間（時間、分）	9.36	-	-	-	-
	行動者率（%）	100.0	75.4	93.0	83.0	65.2
食事	行動者平均時間（時間、分）	0.34	1.15	1.23	1.26	0.50
	行動者率（%）	21.4	70.7	89.9	79.7	26.0
学校での授業・ その他学校での行動	行動者平均時間（時間、分）	0.15	3.26	2.55	5.15	5.00
	行動者率（%）	0.3	0.9	1.6	0.3	7.0
学校の宿題	行動者平均時間（時間、分）	1.30	1.11	1.25	1.15	3.55
	行動者率（%）	35.3	12.0	15.6	11.9	1.1
買い物	行動者平均時間（時間、分）	0.58	1.39	1.45	1.52	1.08
	行動者率（%）	3.9	17.3	25.7	18.7	7.3
テレビ・ラジオ	行動者平均時間（時間、分）	1.51	1.46	2.07	2.13	1.30
	行動者率（%）	33.9	52.2	66.3	62.1	4.7
家族とのコミュニケーション	行動者平均時間（時間、分）	0.15	1.18	1.16	1.28	1.37
	行動者率（%）	0.3	5.3	10.1	9.3	1.0
ゲーム	行動者平均時間（時間、分）	1.52	1.20	1.26	1.55	2.53
	行動者率（%）	19.8	13.8	19.4	26.2	27.9
人と会って行う 交際・付き合い	行動者平均時間（時間、分）	-	1.33	1.30	1.13	1.20
	行動者率（%）	-	3.2	4.1	3.1	12.4

出所 総務省統計局「平成13年社会生活基本調査」

こどもが父親や母親と一緒に過ごす主な行動は、まず「食事」であり、次いで、「テレビ・ラジオ」、「学校の宿題」である。

「食事」を母親と一緒にする子供の比率（行動者率）は、平日、土曜日、日曜日とも9割前後に達しており、ほとんどの場合、母親はこどもと「食事」をともにしている。一方、父親の場合は、平日にこどもと「食事」をともにする割合は54.3%、土曜日63.5%、日曜日70.7%となっており、週休日には行動者率が顕著に上昇する。

「テレビ・ラジオ」をこどもと一緒に視聴することは、母親の場合、平日、土曜日、日曜日のいずれも3分の2前後の行動者率で、曜日による差はほとんどない。一方、父親の場合は、こどもと一緒に「テレビ・ラジオ」を視聴する割合は、平日36.5%、土曜日46.3%、日曜日52.2%と、「食事」の場合と同様に、週休日には行動者率が上がる。

「学校の宿題」も、親がこどもとともに行動することが比較的多い行動であるが、その行動者率は、必ずしも週休日に上昇する傾向を示さない点が特徴的である。特に母親の場合には、こどもの「学校の宿題」に関わる行動者率は平日28.0%、土曜日12.7%、日曜日15.6%で、平日の方が高くなっている。「学校の宿題」への対応は、母親にとっては、まさに日々の営みといえるのかもしれない。

以上の項目に比べると、「家族とのコミュニケーション」の行動者率は、4～10%程度と非常に低い比率にとどまっている。また、ここには示していないが、家事へのこどもの参加はほとんどなさに等しいほどの比率しか占めていない。

総じて、こどもにとっての家族時間は、学業中心のスケジュールへの親の支援と、「食事」「テレビ・ラジオ」を中心とする傾向が強い。

さらに、「人と会って行う交際・付き合い」の行

動者率が、平日43.5%、土曜日30.7%、日曜日12.4%と、週休日に減少し、これに替わって、「一人で」行動した時間が、週休日に増えていくことも気にかかる（睡眠時間を除いた上での、「一人で」行動した時間は、平日2時間22分、土曜日2時間50分、日曜日3時間11分）。こどもたちが孤独な週休日に、自宅で行う行動の中心は、「テレビ・ラジオ」「ゲーム」である。学業のスケジュールからある程度解放される週休日のこどもの生活時間は、家族や友人に向かって開かれていくのではなく、睡眠不足の解消と1人遊びの世界の中に閉ざされていくのだろうか。それではあまりに寂しい。

4 社会の時間とこどもたち

「社会生活基本調査」の平成8年、13年調査では、こどもたちの生活時間の社会との関わりを示すきわめて興味深い調査項目の1つとして、ボランティア活動への参加実態が調べられている。

表5は年齢階級別のボランティア活動行動者率を平成8年と平成13年で対比したものである。この5年間に、ボランティア活動行動者率は年齢計で25.3%から28.9%へと3.6%ポイントの増加を

示した。各年齢階級とも、行動者率の上昇が見られたが、もっとも顕著だったのは、「10～14歳」の小中学生であった。すなわち、「10～14歳」のボランティア活動行動者率は、平成8年の24.9%が平成13年には36.3%となり、11.4%ポイントも上昇したのである。さらに、平成13年における「10～14歳」のボランティア活動行動者率は、「40～44

表5 年齢階級別ボランティア活動行動者率
—平成8年、13年

	平成8年	平成13年	8～13年増減
	%	%	%ポイント
年齢計	25.3	28.9	3.6
10～14歳	24.9	36.3	11.4
15～19	14.9	24.0	9.1
20～24	12.2	19.7	7.5
25～29	15.3	18.3	3.0
30～34	24.5	24.6	0.1
35～39	35.2	36.1	0.9
40～44	35.0	38.4	3.4
45～49	31.4	34.7	3.3
50～54	29.9	31.0	1.1
55～59	28.4	30.9	2.5
60～64	28.7	30.5	1.8
65～69	29.9	31.4	1.5
70歳以上	22.9	25.5	2.6

出所 総務省統計局「平成13年社会生活基本調査」

表6 ボランティア活動の種類別行動者率及び平均行動日数

	10～14歳		15歳以上計	
	行動者率	行動日数	行動者率	行動日数
	%	日	%	日
総数	36.3	-	28.4	-
健康や医療サービスに関係した活動	1.0	15.4	4.8	13.9
高齢者を対象とした活動	8.1	8.4	4.9	31.5
障害者を対象とした活動	4.3	12.1	2.1	23.9
子供を対象とした活動	4.0	9.8	5.4	20.0
スポーツ・文化・芸術に関係した活動	2.3	26.3	3.2	38.3
まちづくりのための活動	19.9	5.7	13.7	10.8
安全な生活のための活動	4.8	5.1	5.6	9.8
自然や環境を守るための活動	17.2	11.6	7.5	23.8
災害に関係した活動	1.6	6.7	1.4	5.3

出所 総務省統計局「平成13年社会生活基本調査」

歳」のピークに次いで高いものとなっていることも注目される。

「10～14歳」のこどもたちの参加しているボランティア活動の種類は、第1位が「まちづくりのための活動」（行動者率19.9%、平均活動日数5.7日）、次いで「自然や環境を守るための活動」（行動者率17.2%、平均活動日数11.6日）となっており、「15歳以上計」に比べると、「自然や環境を守るための活動」の行動者率が相対的に高い傾向を示している。

以上の結果からうかがえるボランティア活動へのこどもたちの参加の進展は、かれらの生活時間の中にどのような社会とのつながりをもたらしていくのか、また、こどもたち自身は、このことをどのように価値付け、評価しているのか。こうした問いは、社会の時間とこどもの生活時間という視点から、今後掘り起こしていくべき重要な課題を提起するものと思われる。それは、こどもたちの「現在」に埋め込まれた、大きな「未来の芽」であるかもしれない。

5 むすびにかえて

以上簡単にみてきた、「社会生活基本調査」平成13年調査結果からうかがえるこどもの生活時間の実態と、それが含意するこどもたちの「困難な時代」の現実は、冒頭に紹介した連合総研「こどもの生活時間調査」の結果とも、ほぼ共通するものであった。連合総研調査は、小中学生の生活時間の中に、「短い睡眠、不規則な食事、スケジュール

に追われる生活、そして、少ない外遊び、長いテレビ、テレビゲームの時間、家族との会話の不足、受験の重圧」などの事実を見いだした。その生活面での帰結の1つは、こどもの心身の健康状態にともる赤信号であった。すなわち、同時に実施した生活実態調査の中の健康状態に関する設問への回答からは、こどもに疲労とストレスの症状が広く見られることが確認された。「暴れ回りたい」、「朝、食欲がない」、「疲れやすい」、「大声を出したい」、「夜眠れない」、「すぐ不安になる」、「お腹が痛い」、「なんでもないのでイライラする」といったことが「ある」と答えるこどもが、小学生男子ではいずれも3割程度かそれ以上あった。小学生女子では、男子を上回って「ある」とする回答が示され、中学生にもなると、男女とも、この比率はさらに高まる傾向をみせた²。

こどもたちは、生活時間におけるゆとりの回復を求めている。こどもたちの生活においても、「ワークライフ・バランス」の実現が急務である。それは、単に暇な時間を増やせばよいという消極的なものではないだろう。こどもの時間と家族の時間、社会の時間が、「豊かな時間の創造」に向けて協働しあうような関係を構築する可能性について、こどもたちも含めた衆知を集める必要があるだろう。まずは、生活時間の「現在」と、そこにはらまれている「未来」を、虚心坦懐に見つめ直す作業から始めなければならない。「社会生活基本調査」のデータとの対話が、ますます重要になってくるだろう。

(すずき ふじかず

財団法人 連合総合生活開発研究所 副所長)

2 連合総合生活開発研究所(1996)、『子どもの生活時間調査研究報告書』、P.10。